

<!-- ファイル名候補: final\_manuscript.md -->

# 黄昏を綴る魔導書

## 著者

遠野 創

---

砂は琥珀色の光を吸って、古い錆のような色に染まっていた。

大気はひどく乾燥し、風が吹くたびに、細かな砂粒が石造りの円塔の壁を削る音をする。カサカサと、それはまるで、誰かが古い羊皮紙をめくり続けているかのような、乾いた、執拗な律動(リズム)だった。

アルス・トラヴァーは、煤けた外套の襟を立て、その廃墟——かつて学術都市と呼ばれ、今は『沈黙の書庫(アルカハ)』と渾名される場所の門をくぐった。

彼の目的は一つ。この地の底で静かに周囲の現実を侵食しつつあるという、劣化魔導書の回収だ。

革の手袋をはめた左手を動かすと、外套の袖の隙間から、かすかに硬質な音がした。彼の左腕の皮膚には、黒いインクで刻まれたような文字がびっしりと浮き出ている。かつて禁書に触れた代償。彼の肉体の一部は、すでに人間ではなく「記述された文章」へと置き換わっていた。文字が肉を侵食する速度は遅いが、確実に彼の時間を削っている。

中央の書庫へと続く階段を下りると、ひんやりとした地下の空気がアルスを迎えた。埃と、古い植物性インクの、わずかに酸っぱい匂い。

奥へ進むほど、世界の「解像度」が奇妙に狂っていくのを、アルスは鋭敏に感じ取っていた。石壁の継ぎ目が、滑らかな曲線ではなく、階段状の鋭いドットのように角立っている。光と影の境界線は不自然に間引かれ、まるで限られた色数だけで無理に描かれた絵画のようだった。

魔導文字の摩耗による、空間の記述バグだ。

「……そこまでです、回収官」

かすれた、真鍮の歯車が噛み合うような声が、書庫の暗がりに響いた。

影の中から現れたのは、少女のカタチをしたものだった。関節部は細い銅線と歯車で繋がれ、衣服に見える部分は、びっしりと細かい文字が不規則に並んだ羊皮紙を繋ぎ合わせたものだ。

古代の自律記述人形(オートマタ)——シラ。

彼女が動くたび、その足元から、発光する文字の断片(ルーン)がぼろぼろと零れ落ち、床の石畳に触れては虚空へ消えていく。彼女の存在そのものが、磨耗し、崩壊しつつある記述体だった。

「君が守っている魔導書が、周囲の地史記述を汚染している」

アルスは静かに言った。その声には非難の色はなく、ただ冷徹な事実だけが含まれていた。

「このまま文字の錆(ルスト)が広がれば、この砂漠一帯の物理法則が固定されなくなる。空間のドットが粗くなり、やがて虚無の霧へと還るだろう。引き渡してもらいたい」

シラは首を横に振った。その動きに伴って、彼女の音声機関から不規則なクリック音が漏れる。「できません。私は……主人の『最後の1行』を綴るために作られました。この書庫に残されたすべてのインクの質量を使い切るまで、記述を止めることは許されていないのです」

「だが、その文字の形状(フォント)はすでに崩れている」

アルスは左手の手袋を外した。剥き出しになった彼の左腕。そこには、『……故に、世界は黄昏を迎え……』という文字の列が、まるで生き物のように蠢いていた。

「文字は物理的な質量と形状によって魔力を保つ。君の主人が遺した書は、長年の風化で文字の角が丸くなり、本来の論理(コード)とは違う意味を出力し始めている。それが、この空間のバグの原因だ。君が綴り続けているのは、もう主人の言葉ではない。ただの、劣化した記述の自己複製(ウイルス)だ」

シラの真鍮の瞳が、かすかに光を失ったように見えた。彼女は自分の羊皮紙の手を見た。指先はすでに擦り切れ、文字の体を成していない。

「知っています……。私の論理回路も、もう、正しい綴り(スペル)を認識できない。だけど……この胸に残る音節だけが、私が私であることの……唯一の証明なのです」

彼女の発した「音節」という言葉に、アルスは微かに眉を動かした。

ミステリーの謎が解けるように、彼の脳内で地史のパズルが組み合わさる。

なぜ、この砂漠の真ん中の書庫だけが、完全に消滅せずに持ち堪えていたのか。それは、彼女が「誤った文字」を綴ることで、意図的に世界の崩壊を局所的なバグとして繋ぎ止めていたからだ。彼女は主人を忘れたくないがために、世界に爪を立てていた。

「等価記述の原則だ」

アルスは静かに歩を進めた。

「君の主人が遺したかった『最後の1行』は、何かを消去しなければ完成しない。シラ、君がこれまで消費してきたのは、この都市の歴史そのものだ。だが、もうインクは残っていない」

「ええ……。だから、次は私自身をインクに変えて、最後の文字を綴ります。それで、すべてが……終わる」

「それでは文字の錆は止まらない。崩れたフォントで自分を書き換えれば、君は永遠に狂ったバグとしてこの地に残り続ける」

アルスはシラの正面に立った。彼の文字化した左腕が、シラから漏れ出す光と共鳴し、鋭い痛みを訴える。

「私の左腕を使いなさい」

シラが驚いたように真鍮の顔を上げた。

「私の腕には、帝国の厳密な書体で綴られた『世界の安定を規定する一節』が宿っている。この文字の質量と形状は、君の主人の崩れた記述を相殺し、正しい論理へと導くためのインクとして、十分すぎるほどの情報量を持っている」

「ですが、それは……あなたの腕が、完全に消滅することを意味します」

「元より、禁書に侵された腕だ。世界のバグをフィックスするために消費されるなら、これ以上の等価交換はあるまい」

アルスはシラの羊皮紙の手に、自身の剥き出しの左腕を重ねた。

触れ合った瞬間、激しい光のスパークが走った。

16色の琥珀色と漆黒が、激しく、スタッカートのような速度で明滅する。アルスの腕から、黒い文字の列がシラの身体へと流れ込んでいく。それは、彼女の崩れた文字の角を削り、本来の鋭利な形状へと修復していく、静かなる論理の刃だった。

シラの胸の奥で、カチリ、と正しく歯車が噛み合う音がした。

彼女の瞳に、本来の、澄んだ電子の光が戻る。

「……見つかりました」

シラの声は、もう擦れていなかった。美しく、調律された鐘の音のように響いた。

「主人が遺したかった、最後の1行が」

彼女はアルスの左腕から得た最後のインク(情報量)を使い、虚空に指で、一列の文字を鮮やかに描いた。

それは魔術的な攻撃でも、世界の改変でもなかった。ただの、古い時代の、素朴な記録だった。

『——今日、この地に美しい夕暮れがあったことを、ここに記す』

その文字が完成した瞬間、書庫を包んでいた空間の歪みが、ずっと引いていくのをアルスは見た。角立っていた石壁のドットは滑らかな石の肌へと戻り、間引かれていた影は、自然なグラデーションとなって現実の闇へと溶けていった。

そして、シラの羊皮紙の身体もまた、その役割を終えたかのように、静かに白い灰となって崩れていく。

彼女の真鍮の歯車が、床に小さく、綺麗な音を立てて転がった。

「……見事な着地だな、記録者」

アルスは自分の左腕を見た。

そこには、もう蠢く黒い文字はなかった。皮膚は滑らかな、しかし感覚を失った白い傷跡(ブランク)へと変わっていた。文字を失ったことで、彼の左腕は完全な機能を停止したのだ。等価交換の代償。

アルスは落ちていた小さな真鍮の歯車を一つ拾い、外套のポケットに収めた。

古書の埃の匂いが、風に吹かれて砂の彼方へと消えていく。

回収官は、感覚のない左腕を外套の中に隠し、黄昏の琥珀色に染まる地上へと、ゆっくりと階段を上っていった。

(完)